
酒井恒博士と海産動物採集会の思い出

伊藤十治

博物館主催の海産動物採集会及び本県沿岸における海産動物相についてのべる場合には、横浜国立大学名誉教授 酒井恒博士に満腔の謝意を申しのべてからにしたい。酒井恒先生には、昭和28年より現在にいたるまで、県内各地で直接・小中高校生及び教職員を対象にご指導いただきその影響大なるものがあったと思われる。筆者の経験している中・高校生がこの機会が一生の指針となって自然科学の分野に進路を決めた生徒も数多くいる。このようなことは、全国でも本県のみでまことに有難いことだ。博物館でもこの採集会だけは年一度の「七夕」のように欠くことのできない。しかも人気のある採集会はほかにないであろう。酒井恒先生との縁は、小林貞七館長の記録によると昭和26年博物館創立当時、標本同定をお願いしたのがきっかけのことである。酒井先生は、大野市東一番 松山新太氏とご親戚になるので福井地方はよく知っておられる。

海産動物採集会の第1回は昭和27年8月17日～18日の2日間、敦賀市常宮方面で行われた。当時、筆者は福井大学の3年生であり小林館長は春山小学校の教頭で採集会の庶務係であったと記憶している。筆者は、新聞紙上で8月16日・採集会の講師として 酒井恒先生が敦賀市常宮にみえられることを知り、現館長に採集会に参加させてほしいと駅の電話でうずうしくも申し込んだ思い出がある。前々から、カニ博士の酒井先生、酒井のカニか、カニの酒井かと世間で言われる世界的専門家にお会いできるぞと思ったらやもたらまず、現館長に無理をいったものである。当時、元館長である堀芳孝先生が、筆者を紹介して下さったのが始まりで、そのようすがありありと眼にうかんでくる。酒井恒先生は色メガネをはめておられ、ものしづかな口調で初対面の筆者に、T.H.Huxleyの「ザリガニ」という書物(ドイツ語版)を気軽に貸しむしようとおっしゃったときの感激の一瞬は、我が青春時代の思い出の1つである(福井県博物同好会会報12号参照)。このことが発端となり、酒井恒先生のもとで昭和34年から1ケ年間留学することができ、公私共にご厚配に預り、酒井恒先生は、筆者にとって恩師であり、また慈父のような心境である。第1回の海産動物採集会のようすは記録にどどめる機会がなかったようである。筆者がするより、現館長、明道中学校の田尻利広教諭がされる方がより適切と思うが、誤りや不備の点は改訂・追加していただくことにして思い出のまゝつづてみよう。

参加者は主として、博物館関係者数名、小中高校生が数名(藤島校の2年生・未定君?とか言

ったと思うが………) 大学生は筆者のみで計 20 名前後だったと思う。敦賀の棧橋から定期船にて常宮へ、そのとき、酒井恒先生と元館長の堀先生などが乗船された。17日の昼頃、常宮につき宿舎で昼食をとり、午後一時頃より磯採集にてかける。このとき、「のぞき」というものは、とても便利であると思ったのがなつかしい。海中一面、何もないと思ったら、石をまくるとその下にはいろいろな海産動物がいるのには驚いたものである。夜食をどってから、筆者と高校生の2人で、敦賀湾へ焼玉エンジンの船で底引きあみにかかる動物をもらいくに出かける。夜、海へするのは久し振りである。かい中電燈・バケツ・ホルマリン・大きなピンセット・採集びんなどをもっていく。船に乗るとき、漁師が「命がほしかったら乗らない方がよい」と言ったときにもどめずに「どうしても乗せてほしい」と言って乗ったものである。漁師の言うことがじよう談と思ったのか?もし船がてんぶくしても湾の中だから泳ぐ自信があったのか?若いちはあとから思いだすと苦笑せざるを得ない。漁師が言ったように、いざ海へると夜風が顔をなぐるくらいではない。なまあたかいい雨風が顔をたたきつける。空をみあげれば星がきらきらといいたいがみあたらない。漁師2人であみを落していくので我々2人はどうすることもできない。ござの上で夜空の星をみつけるのに時を過ごす。ときどき、横波を船がくうとみて、ぶきみな音に合せたかのようにからだが横だおしになる。こうなると、いきさか漁師の言ったことが気になる。自分の心細きの戦いに不安をいたくためか高校生ととりどめのない会話を始める。エンジンの音と風などで言葉がどぎれどぎれになるが一向さしつかえない。会話の内容についてはどうでもよい。口から音を出すことによってその不安からのがれればよいわけである。30分間か?いや1時間ぐらい海底をあみで引いたどうか。あみを引くといつても、船が進んでいるのか止っているのか、エンジンを冷やすために管から温水が流れている状況から船が走っているのだろうと推察するだけである。漁師から「あみを引きあげるぞ」と言われて船がゆれるくらいの不安は一度に吹きどんしてしまう。生れて始めてこの眼であみの中に何かはいっているのかを確かめるのだ。かい中電燈をつけて足もとを照らす。早くあみがあがってこないかと待ちどおしい。昔から待たせる身になつても待つ身になるなどいったことがよくわかる。このあせる気はどうしょうもないで漁師の手伝いをする。50mぐらいつなを引いたであろうか?ひもであみの下をくくつてあるので大きな容器の中ではどく。かい中電燈で照らしても、ひもをほどいたときの状況ははっきりしない。色はさまざま、ピカツと光るものもある。エビカニ、カレイ、ナマコ、貝がらなどの形らしいものがある。思わず"お、いるぞ!!"と言ってしまう。容器の中にある動物から、漁師が金になるもの(主としてエビ)を、船底がいければのようになっていのでそこへ入れる。残った動物をバケツに入れてその中へホルマリンをたらたらと落とす。薬品を入れるためにカニなどはびっ

くりしたようにもがき苦しむ。そのためにカニの自切現象がおこる。このような動作を2、3回くりかえして陸地にもどる。宿舎にもどればほとんどのはねてしまっていた。わが寝具に包まれていても船の上にいるみたいだ。朝早くから、夜中に採集してきた動物をバットの中に出して同定できるようにする。酒井先生がピンセットで「これは○○」「これは△△」と即座に動物の種名を教えて下さる。ときには、動物を手にとりながらルーペでのぞいてから教えて下さる。あるときは動物図鑑をみながら、ルーペでのぞいて「××だね」とおっしゃる。動物の種名を言われるだけでなく、それにまつわる忘れない2、3の点について説明をして下さる。学者というものは、たいしたものだなあと感心した。朝食をとり磯採集にてかける。酒井先生のいでたちは、半ズボンにカツターシヤツ、首には西洋手ぬぐいをまき、頭には大きなつばのあるぼうし、肩には愛用のカメラ、ルーペをもっていらっしゃる。ゴムゾーリをはいてでかける。採集場所にて動物の種名を教えて下さる。同じ動物を何回聞いても、にこにこさせながら記憶するまで教えて下さる。

以上は我が日記を骨組みにして書きつづったものである。

このようにして採集されたものを列記したのが次表である。ただし、1.10.11.14.15.16回の記録がないので動物相がわからない。9回(昭和35年8月1日～2日)には酒井先生が外国へ留学されたので、金沢大学教授・熊野正雄先生に講師としてご指導をお願いしている。

次の表から、いろいろ調査研究材料が多くあるが紙面の都合で割愛し、別の機会に究明したい。

No.	採集年月日	採集場所	参加者数	動物種類数	魚類	原索動物												
						棘皮動物	節足動物	軟體動物	擬軟體動物	環形動物	扁形動物	ひも形動物	腔腸動物	海綿動物				
1	昭27.8.17～18	常宮	20						(未記録)									
2	28.7.25～26	"	25	85	5	5	15	24	11	6	7	2	0	5	5			
3	29.7.27～28	たか巣	40	90	15	3	11	42	6	1	6	1	1	2	2			
4	30.7.22～23	安島	60	79	7	2	9	26	13	2	9	3	1	5	2			
5	31.7.29～30	厨	48	97	12	2	11	38	27	2	6	0	0	8	2			
6	32.8.1～2	甲楽城	40	55	16	3	10	17	4	2	1	0	0	2	0			
7	33.7.31～8.1	早瀬	(数十名)	92	12	2	7	24	27	4	8	2	1	5	0			
8	34.8.1～2	鮎川	60	56	5	3	6	10	23	0	5	2	0	1	1			
9	35.8.1～2	敦賀湾水島	60	29	0	3	8	2	7	1	3	0	0	4	1			
10	36.7.28～29	赤崎	30															
11	37.7.30～31	常宮	50															
12	38.7.29～30	梶浦	60	71	7	1	7	16	24	1	6	1	1	5	2			
13	39.7.30～31	安島	60	50	2	2	3	15	18	0	4	1	0	3	2			
14	40.7.29～30	安島	45															
15	41.7.29～30	安島	40						(未記録)									
16	42.7.29～30	安島	55															
17	43.7.29～30	長橋	60	86	5	3	8	31	25	2	6	2	0	1	3			